

# ART KISS

*Contemporary Art Museum, Kumamoto*

# LETTER

FOR KUMAMOTO

ART PEOPLE

vol.

14

2002.8.15 熊本市現代美術館発行



# ドクメンタ11

## ドクメンタ11 [6.8~9.15] Documenta11



Yinka Shonibare <Gay Victorian> 1999

ウイんカ・ショーニバレ <ゲイ・ヴィクトリアン> 1999

現代美術最大の国際展ドクメンタが、ドイツのカッセルで開催中です。5年に1度行われてきたこの展覧会は、当初は統一への願いを込め、ドイツの東西分断の時代(1955年)にはじまったものですが、今ではベネチア・ビエンナーレと並び、世界の現代美術の流れを決定する重要な国際美術展として位置づけられています。今回はナイジェリア出身のオクウィ・エンヴェゾがアートディレクターを務め、多くのアフリカ系アーティストを紹介するとともに、第3世界の現実の記録を主題にした写真やビデオの作品が眼を引きました。

[アート・ド・ギャン]

## ART DE GYAN

※もろ、むかひですよね!熊本外でアート、どうなのですか。

## アン・トワメトワキューブ

熊本市新市街五里通り6-19 ☎212・9550

●【コーダ・ヨーコ展】(6.1~6.30)ショップのロゴマークやキャラクターも手がけたコーダ・ヨーコさん。陽気な色彩とポップなイメージが踊る、葉書やマグカップ、時計、小さな絵画などは、見るものを明るく気分させる。(H・T)



コーダ・ヨーコさんの作品&lt;untitled&gt;

## ギャラリーカフェ プリランテ

熊本市桜木2-14-5 ☎369・0095

●【ハジメマシ展】(6.1~6.15)「はんどわーく」の川上恭輔さんの陶器や川上白美子さんの布小物と、林田歌乃さんのオープン粘土によるミニチュア・テディなどの初個展。同じじはらないリラックスしたムードに作り手の余裕が感じられる。

●【藤元『天(そら)』三人展】(6.17~6.29)安藤妙子さん、西山尚一さんの陶芸、坂口千治さんの書による3人展。遊び心にあふれた花器や鉢など、お洒落なインテリアショップに置いてもお色合いの出来。200点が一週間では完売というもうなずける。(A・S)

## 熊本岩田屋六階美術画廊

熊本市桜町3-22 ☎322・1111

●【沖縄の伝統工芸展】(6.11~6.17)沖縄の伝統を守りつつ、新しい表現に挑戦する8人の作家に焦点を当てた展示。相馬正和さんの《象文壺》、《赤絵泡振特大》、小橋川太郎さんの《蓮紋深鉢》などが力強い作風で印象に残った。

●【藤井祐二 油彩展】(6.25~7.1)南欧風景を描いた油彩の展覧会。点描に近いタッチが魅力的だった。(K・K)

## KRIZIAクリッツァ

熊本市上通町セントラルハイツ ☎369・2363

●【藤澤麗夫作陶展】(6.4~6.10)は、このブティックの初めての展覧会。兵庫県三田市のこの作家の白釉、飛騨磁、伊賀保の作品は、様々なサイズのバランスがよく、洋器の展示にも新鮮なリズムを与えていた。(Y・H)



「藤澤麗夫作陶展」展示風景

## 画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町5-13宅建ビル1F ☎343・9664

- 【芸術家の町 IV 楳木町展】(6.1~6.10)
- 【芸術家の町 III 菊陽町展】(6.11~6.20)
- 【藤部勇 輝輝デッサン展】(6.21~7.2)

## ギャラリーキムラ

熊本市水道町3-5(上通KビルBF) ☎327・0166

●【Class gaju展】(6.3~6.9)松岡志保さんと創作粘土教室Class gaju30名のメンバーとの初個展。主宰の松岡さんは、118歳で石粉粘土に出会って、この世に存在しない夢のようなものを、自らの手で作り出せる喜びに夢中になって、今年で8年目になります。初個展を開催できて、とても嬉しいんです。」と笑顔で語る。野菜がぎっしり積まれたような巨大な作品には、豊かな想像力とそれを実現する力量が十分に表現されている。また、コックさんの人形の深みのある優しい表情には、人の優しさが「かたち」として表れている。



松岡志保さんの作品&lt;Vegetable tree&gt;

●【星と彩展】(6.10~6.16)中井菜香さんの個展。月や太陽、毛糸のまり、紙ふうせん等、丸いモチーフを構図の中に効果的に使っている。草花、子供、小動物を描く筆遣いはかざりなく優しいのに、感情に走らない不思議な強さを秘めた作品。

●【自分が感覚するもの 西村采知展】(6.17~6.23)西村さんの初個展。5年間描きためた作品を展示。作品を見る人は自分と違う印象を持つことに驚きを感じていると語る。アクリル、ペン、油彩、パステル等様々な素材を使い自身の世界を作り上げている。画面構成には細心の注意を払い、作品の完成度が高い。画面に使われるのは淡い色使いでも、描線の力強さに負けていない。今後の展開が楽しみである。



西村采知さんの作品&lt;旗をもつ少年&gt;

●【第17回洋画グループ 春秋展】(6.24~6.30)それぞれマチエールや画題にこだわりながら、丁寧に具象で描いていた。(H・T)



## アートルーム イケオ

熊本市新市街6-6 ☎324・1414

- 「第14回グループアトリエ741展」(6.5~6.10) 美術教室アトリエ741で学んだ、旧熊本近代美術コースと熊本学園大学社会福祉学科卒業生によるグループ展。身近な人物や風景などを中心とした油彩・版画などが並んだ。
- 「啓祥斎・藍の器展」(6.26~7.1) 佐世保市に400年続く三川内焼。さめの細かい磁肌に施された染付が涼やか。壺さようたつぷりの唐子の回柄も楽しい。(A・S)

## 島田美術館ギャラリー&島田美術館蔵庫

熊本市島崎4-5-28 ☎352・4597

- 「岸原あさ子 藍染絞展」(6.1~6.14) 涼しげな藍染絞の展覧会。着物、袋物など。(K・K)

## 四季の彩

熊本市上通4-10トラヤビル ☎351・8332

- 「六月の詩」(6.1~6.15) 川口もと子さん、斉藤一也さん、関安紀さんの三人展。ファンタジー画や静物画、肖像画等、各々課題をもって制作に励んでいる様子が見える。
- 「朱夏の会展」(6.16~6.30) 水彩、油彩、版画など。田上由貴子さんや星田那智子さんの花を主題にした作品は特に眼を引いた。(H・T)

## ギャラリーレストラン芳文

熊本市南高江5-7-76 ☎311・3344

- 「ア・ラ・カルト シンプル かわいい 心地いい 福&BAG展」(6.12~6.19) 唐子やウサギ、金魚など小さく愛らしいブローチや小物。素敵な生地のハンドバッグ、草木染のスカートや衣類、色使いの美しいビーズのアクセサリなど。ひとつだけしかない手づくりのものだからこそ、購買欲はそそられるばかり。(H・T)

## 画廊喫茶三点点

熊本市手取本町3-8有明ビル ☎326・3040

- 「『革』と『草木染・糊り』二人展」(6.1~6.10) 革で袋物、小物などを制作する植田京子さんと、草木染の糸や布で制作する五木綾子さんの二人展。
- 「第六回来民・特設うちわ展」(6.12~6.20) 61人の方々によるうちわの展覧会。200本のうちわが並ぶ様子は壮観。
- 「すばらしき峰々 山岳写真展」(6.21~6.30) 淋治芳さんが、穂高を撮影。透明な山の空気を感ずるような写真の数々。(K・K)

## 喫茶りんどう

熊本市水前寺5-18-1熊本県庁本館1F ☎383・1111(内線5852)

- 「熊本学園学園作品展」(6.1~6.30) 刺し子や貼り絵の作品を展示。「へたくそでごめんね」と書かれた絵手紙(上田朋夫さん作)がほほえましい。(K・K)

## 鶴屋本館8階美術ギャラリー

熊本市手取本町6-1 ☎356・2111

- 「三輪休雪・眞作・和彦 茶陶展」(6.4~6.11)では、三代にわたる萩焼で、伝統に対する各人の個性が表れた展覧会であった。
- 「宮崎喜久夫油彩画展」(6.12~6.18)は渡仏30周年を記念して開催され、パリの街並みなどのデッサンでは、旅人ではない、日常の静かな観望しが感じられた。
- 「戸田東隆・純一親子展」(6.19~6.25)は今回で5回目となる木工と日本画の作品展。
- 「丁紹光 染日展」(6.26~7.2)は、絵画、織物、冷粕の技法をつかった作品を2会場で展示。(Y・H)

## 鶴屋東館8階ふれあいギャラリー

熊本市手取本町6-1 ☎356・2111

- 「ルナ・フローラ・パンの花 クレイ染の花展」(6.4~6.11)では、制作を初めて間もない人々の作品も開放的な明るさを備え、見ていて楽しく、華やかで上品な花が咲きそろった。
- 「熊日フォトサークル夏の撮影会作品展」(6.12~6.18)
- 「アートニット糸遊び アントワープの風展」(6.12~6.18)は、各地に教室をもつ熟練した6名の方の作品展で、模様と色彩のコンビネーションが、ニットの開放感に華やかさを添えていた。
- 「親友会 夏の撮影会作品展」(6.19~6.25)では、撮影旅行での各自の日常的な視点が映しだされており、変化に富んでいた。
- 「熊本韓国会江津教室新作画展」(6.19~6.25)では青木定夫さんの指導を受ける14名の方がそれぞれ3作品を発表。形式の美を改めて感じさせられた。
- 「さんしょく展」(6.26~7.2)では安倍伸子さん、池田実雪さん、荒木孝子さんによる、シルバークレイ、銀線にガラスなどを組み合わせた軽やかで涼しげなアクセサリ等の展示。
- 「清水写真教室展」(6.26~7.2)風景、花など穏やかな時間を切り取ったものが多く和やか。(Y・H)

## 鶴屋観光物産交流スクエア

熊本市手取本町6-1 ☎356・2111

- 「岩下敬治POP ART展」(6.22~6.24)

## アートスペース大宝堂

熊本市上通5-6 ☎354・2155

- 「川上順一展スペイン・アンダルシア~光のなかで...」(5.29~6.3) 熊本出身で、セビリヤで暮らす川上さんの1年ぶりの個展。闘牛やアンダルシアの風景など油彩50点、人物や抽象的なテラコッタなどの彫刻15点の展示。
- 「松井天一個展」(6.5~6.10) 示現会会員の松井さんの公募展出品の大作を中心に展示。「川辺川」など、水や岩のリアルな表現は強い説得力を持つ。(K・T)
- 「春丘社日本画展」(6.12~6.17)
- 「第22回興玄書展」(6.19~6.24) 興玄会の松本蓬母会長が指導する56人が、1点ずつ出品している。作品は篆書からかなや行草書まで、各書体を軸や額で展示。松本さんは、陸遊詩を2曲屏風にし、豊田大徳さんは自作の肥後狂句を書いて美しく表現している。谷本峰雲さんや井田峰月さん、江口幹城さんも賛助出品していた。(S・K)
- 「『空』二人展 加藤裕行・水野ヒロシ」(6.26~7.1)

## ギャラリー・ひまわりハウス

熊本市樹町3-22 ☎322・1111

- 「アートグループ『そよ風』展」(6.1~5.16)
- 「アートグループ『そよ風』展パート2」(6.18~7.7) 身近な静物や人物など、おだやかなタッチの作品が並んだ。(A・S)

## 上通郵便局プラザU

熊本市水通町3-37-1F ☎326・4123

- 「写団われもこう写真展 山野の花ばな」(6.5~6.11)では、四季折々の、ひっそりと咲く草花に目を向け続ける5名の30点。
- 「地球を歩く写真展」(6.12~6.18)は5月に開催して好評を博した田中進さんの世界59カ国の旅の記録の二度目の展覧会で、各地での生き生きとしたふれあいが伝わってくる。
- 「仲本政秀・功 父子絵画展」(6.19~6.25)では、力強い色彩と躍動感ある筆致の作品が並んだ。
- 「涼夏日傘展 手摺遊彩」(6.26~7.2)は後藤綾さんとその生徒さんによる日傘の展覧会。白、黒地の傘に、草木などの彩色が爽やかであった。(Y・H)

## 県立図書館

熊本市出水2-5-1 ☎384・5000

- 「菊岡町立菊岡南小学校」(5.28~6.18)では、学年毎の課題に取り組んだ力作が並んだ。(Y・H)

## 熊本県立美術館本館・分館

熊本市千歳城町2-18 電話351-8411

- 「熊本県写真協会展」(6.4~6.9) 会員の作品の外、国際写真サロンや各コンテンツの入賞作品、海野和男写真展など分館の4室全部を使つての展示。(K・T)
- 「2002・アートスクールあとりえバリュー展」(6.4~6.9)
- 「GRAPHIC MAN」(6.4~6.9) 九州のグラフィックデザイナー12人のグループ展。洗練されたポップな感覚の作品が並ぶ。缶バッジのガチャガチャを設置するなど、観客が参加する楽しみもある。(H・T)



高本清隆さんの作品「WAR」

- 「RKK日本画教室展」(6.4~6.9)
- 「第13回国際文化交流会 女流茶掛け・屏風展」(6.4~6.9) 「茶室の掛け物」という、我が国伝統の美術様式を現代の日常生活に密着させたいという意図で、国際文化交流会(前野孝一会長)が毎年開いている交流展である。「茶室にふさわしい語句」はそれぞれに意味深く、表現にも多彩さがうかがえておもしろい。同じ「茶掛け形式」と言っても、表具には現代の感覚を盛り込んだものも見られて興味を覚えた。ここ数年は来場者も増え、質問者も多くなったというから、だんだん関心と呼んでいるのだろう。(T・M)

- 「第30回RKK学苑総合作品展」(6.11~6.16)
- 「第5回南輪会日本画展」(6.11~6.16)
- 「JIA熊本建築家の会作品展」(6.11~6.16)
- 「くまもと社会保険センター日本画教室第10回GROUP「窓」展」(6.11~6.16)
- 「第27回写画あけぼの会写真展「野の花」と「花のある風景」」(6.18~6.23)
- 「二〇〇二年度デザイン賞」(6.18~6.23)
- 「石交會展のアート展」(6.18~6.23)
- 「熊本書藝振興会役員展」(6.18~6.23) 熊本書芸振興会(平田抱山会長)が主催する「熊本県書道展」の審査員、会員、準会員の書道展である。「熊本県書道展」も組織が大きくなって、会場の都合で、公募から役員までの同時開催が困難だから、役員展を切り離さざるを得ないという。役員展は半切以内という大きさの制約の中で、作品内容はさすがに各会の指導者としてのプライドを見せてくれたようだ。(T・M)
- 「第19回熊本女性絵画展」(6.25~6.30)
- 「神宮寺正と江中平蔵生有志展(神展展)」(6.24~6.30) 神宮寺先生は熊高の美術教師や県立美術館の学芸課長も勤められたが、先生の江原中学校時代の教え子たち25人の、絵画に限らず写真やオブジェなど美術の幅広いジャンルの作品を展示。先生の若い時代の熱気溢れる指導が伝わってくるような展覧会であった。(K・T)



神宮寺正さん

- 「第七回全国花の会“りんどう”支部展」(6.25~6.30)
- 「第17回維新会・書法篆刻展」(6.25~6.30) 篆刻作家・平方朔水さんが指導する60人の作品103点を軸や額等で展示。会場は、篆書、隷書と篆刻作品が主であるが、石膏で作られた大作の篆刻もあった。平方さんが集めた中国の古印材は、田黄をはじめ水晶漆等70種類特陳されている。平方さんの写源明の篆書や、米村静山さんの随書、流水菫さんの金文が目にとまった。(S・K)

## ギャラリー喫茶去

熊本市千歳城町3-7 電話359-0132

- 「創作布あそび展」(6.3~6.9) 古製をリメイクしたシンプルな衣服の肩に、ちよこんと留まるかかし。他にも人多つきのうさぎ型ポーチや、魚つきの猫型バッグなどが並び、思わず顔がほころぶ。「1日1度は何かしら布や道具に触れている」と穏やかに語る中村さんには、ものづくりを愛する様子があふれていた。(A・S)



中村静香さんの作品

## 熊本伝統工芸館

熊本市千歳城町3-35 電話324-4930

- 「野原れい子 染布展 色味く布選II」(6.4~6.9)
- 「布と陶コラボレーション2002」(6.4~6.9) 永尾伴次さん、布いちこさんによる展示。
- 「ひろのぐらす・ガラスの器展」(6.4~6.9) 本田郁郎さんによる展示。
- 「故きを温めて」(6.11~6.16) 石坂加壽子さんによるジュエリーの展示。
- 「陶・織 3人展」(6.11~6.16)
- 「ピネル窯展」ピネル記念陶芸クラブ(6.12~6.16)
- 「遊楽窯 戸高ジュン作陶展」(6.18~6.23)
- 「藍染ニットの世界」(6.18~6.23)
- 「ハーブとハーブ染織」(6.18~6.23) 北岡ひとみさんによる展示。
- 「古器あそび 手仕事展」(6.25~6.30) 堀川ヒロ子さん、東家百合子さんによる展示。(K・T)
- 「深の工芸展」(6.25~6.30)
- 「原色祥花絵画」(6.25~6.30)

## 熊本市民会館

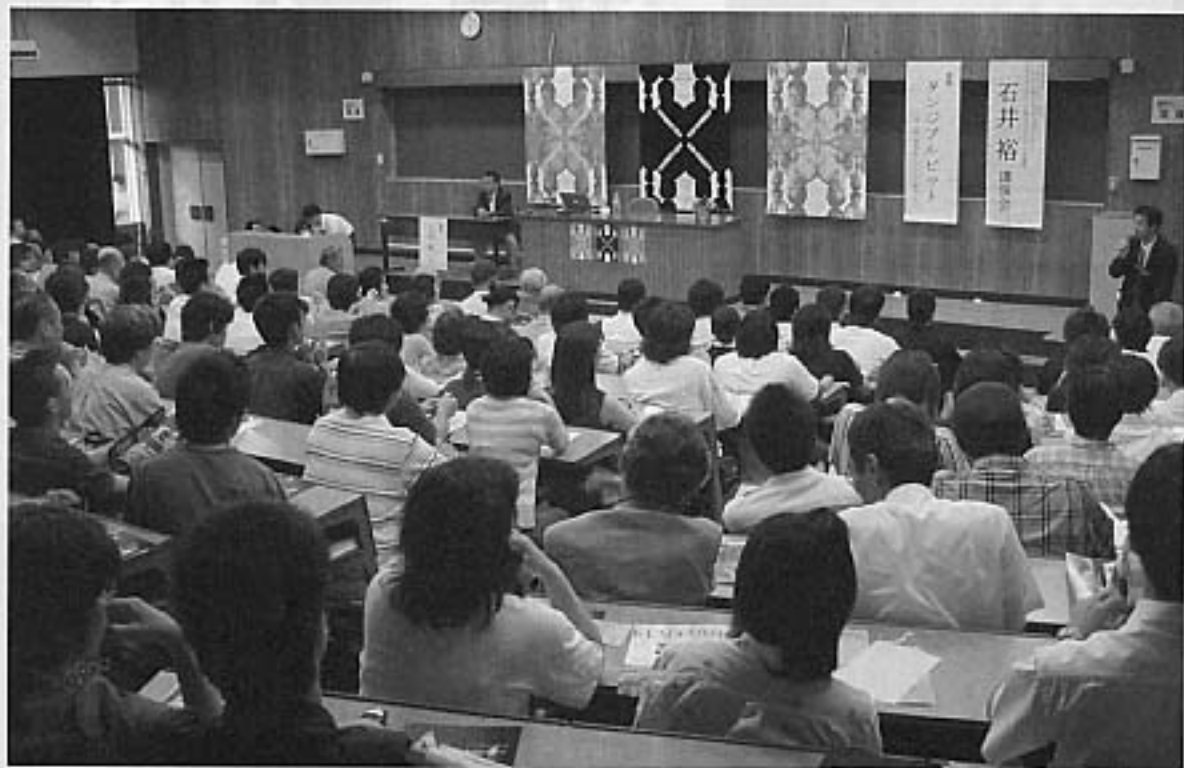
熊本市桜町1-5 電話355-5235

- 「墨藝協会水墨画展」(6.11~6.16) 扇形や茶掛から大作まで様々な大きさで幅広く水墨画の世界を表現する。にじみの効果、白と黒の量感のバランスに気を使う作品が多い。筆致の痕跡を効果的にみせる作品ももっと見てみたかった。(H・T)

## ジェイ

熊本市大江本町6-9(味噌天神電停前) 電話372-8732

- 「高浜正器作品展」(6.1~6.10) 水彩の作品が並ぶ。
- 「川上順一 スペイン アンダルシアの光のなかで」(6.11~6.29) 大宝堂での展示に続いての展覧会。(K・T)



石井 裕 ◎略歴/1956年東京生まれ。1980年北海道大学情報工学専攻修士課程修了。1992年工学博士。日本電信電話株式会社、GND研究所客員研究員(ボン)、NTTヒューマンインターフェイス研究所を経て1995年、日本人初のMIT(マサチューセッツ工科大学)メディアラボ教授となる。1997年、アルス・エレクトロニカ(リンツ)に出品。以後受賞多数。一貫して情報機器と人間の接点(インターフェイス)の問題に取り組んでいる。主な展覧会に「Tangible Bits」情報  
の感触 情報の見配り」(NTTインターコミュニケーション・センター、2000年)がある。



## 石井裕講演会「タンジブル・ビットー人間、情報、物理世界をシームレスに結ぶデザイン」

さる7月8日(月)、熊本市現代美術館イベント第10弾として、熊本大学工学部との共催で「石井裕講演会:タンジブル・ビットー人間、情報、物理世界をシームレスに結ぶデザイン」を開催しました。会場いっぱいの聴衆も、人間とコンピュータの接点(インターフェイス)をテーマにした、石井教授のエネルギッシュな話に魅了されました。また、翌9日(火)には、美術館内のメディアギャラリーに設置される作品「ビンボンプラス」のデザインを考えるワークショップが開催され、参加者と熱のこもったやりとりも行われました。



この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動によせる熱い思いを語っていただきます。第13回は画家の千賀友子さんに楽しいお話を聞きました。

略歴／1910年熊本市に生まれる。上京し、林武や児島善三郎のもとで修行。海老原隆西研究所指導員として活躍するなど、熊本美術界の基礎作り尽力。1980年度熊本県芸術文化功労者。2001年に句集「狂」を出版。

—— 絵画との出会いを聞かせてください。

千賀：昭和の初めですけど、泉洋服店の2階に絵画教室がありました。そこで、林武先生に会ったんです。「絵を描くなら東京に出て来い」って言われて、女学校出てすぐ18歳で上京。でも林先生がすぐ海外へ行かれてしまって、独立協会の研究所に入所して、児島善三郎先生にお会いしたのです。先生宅には先生が福岡出身の方ですので九州出の人ばかり集まっています。元気のいい人ばかりでした。お互いの批評もケンカも、いい勉強になりました。でも当時はブランクそのままとか、どれもフランス直輸入の絵のまねばかりだったような気がします。そして、戦争が始まっちゃうので、東京にいられないので結婚して大連へ。関東美術協会に招かれて制作は続けていきましたが、新しいことをやると軍部ににらまれるので、おとなしく静物画を描いていました。景観の素晴らしい場所でしたが、要塞地域で写生ができないんです。「飛行機献納のための絵を描け、そして写生を許可する」と言われたけど、「壁が！」と思ってやりませんでした。今から思うとめったにない風景を堪能しておけばよかったなって思っています(笑)。

—— 終戦後、熊本に帰って絵画制作を再開しますね。

千賀：熊本に帰ってきて、大連で知遇を得ていた海老原先生と、上通でばったり再会したんです。「帰ってきたのか！」って先生大興奮(笑)。競争でブランクがありましたけど、先生にお会いして絵を始め、展覧会でも上位賞をとってやる気になったのが再スタートのきっかけかな。海老原先生には「100万人運動」という、とにかく絵を描く人を増やして声援をあげれば原力が高くなるっていう持論がありまして、すべてはうまくはいかなかったけど、あらゆる角度から戦争の美術の基本を作った方でした。海老原先生が遺子に傳られたときは、熊本で納まる人ではないと思ってましたし、話し相手も競争相手もいないのは先生も面白くなかったのでしょうか、さばさばしたものでした。



画家  
千賀友子 さん  
Tomoko Senga

—— 千賀さんだけが知っている素顔の海老原さんとはどんな方でしたか？

千賀：女には絵は描けないって、腹の底では思ってたんじゃないかしら(笑)。パリにいるときだけ近代人、おこられちゃうかな。私の方も「いや違う、平等だ」って反論して困らせてましたけどね。海老原先生は話しているうちに興奮しちゃうような熱情的な論議家ですし、普通の人には分かりがたいカリスマ性がありまして魅力的な方でした。それでももちろんところもあってね、パリでクリスマスに誰ひとり呼んでくれなくて、寂しくて悲しくて泣いちゃったんですって。それを思い出して泣くのを見たこともあります。

—— エビ研では児童部を担当されていたそうですね。

千賀：エビ研では海老原先生は「世代会」みたいに本気で絵を描く人達を救って、私は児童部の担当。小学生60人を相手に、それはもう大変大変。罵らない子にはゴツンもしましたよ。でも子供が芸術を好きになるのは、お母さんが本当に重要です。家族ぐるみでやるのが大事。感受性の豊かな子供の頃から美術に関心を持たせないと、大人になってからじゃ遅いんです。エビ研が解散した後、羽仁もと子さんの友の会の熊本支部で、美術部を担当したことがありまして、私がそばにいないとどうしても絵を描かない子がいたんです。その子に集中しちゃうと授業が成り立たない。「どうしようかな」って考えましたけど、一人も全員も両方大事。「できるかな」と思って、本気になって取り組んだら、その子の白痴症が治

ったんですよ。お母さんにとっても喜ばれてましてね。美術には子供の可能性を開く力があるんです。

—— 千賀さんの絵に立ち向かうときの態度や姿勢を聞かせてください。

千賀：絵は半分、狂気の世界なんです。日常を引っぱついたら描けません。「自分の絵を描かなきゃ駄目なんだ」と、自分だけの世界に閉じこもって描き続けていたから、展覧会どころっていうのはあまり考えてなかったんです。それに網膜はく離になってから、視力に自信がなくなって言葉で絵を描いて見たいと俳句を始めたんですが、一般的には俳句と油絵じゃ質が異なる感じがするでしょ。でも芸術のエッセンスを示すという点で全く同じなんです。これまで描きつて純粹な造型表現が大事と思って、文学的な要素を排除してきたんですけど、最近の作品に「俳句的な要素がみえますね」というご意見をいただいたのもうれしかったし、芸術に二重対立なんてないんです。これからの芸術はどんどんあらゆる要素が融合していくだろうと思います。私はたった一本の線を描くのに思い悩み、俳句の助動詞、「の」や「に」の文法に表現がありますので思い悩みます。これでなきゃいけないと思うその表現を見出す一瞬に達するまで、苦しみ悩み。他から見たらばかみたいな話でしょうけど、これが私が芸術に向かい合うときの姿勢なんです。

—— ありがとうございます。

## 今月の展覧会

- カッセル 「ドクメンタ11」(～9.15)
- モントリオール 「モントリオール・ピエンナーレ」(9.26～11.3)
- ロンドン テート・ブリテン 「ルシアン・フロイト」展(～9.22)
- パリ バレド・ト・キョー 「ウォルフガング・ティルマンス」展(～9.15)
- 群馬県市立美術館 (099-224-3400) 「黒田清輝展」(～9.1)
- 宮崎県立美術館 (0985-20-3792) 「ミロ展」(～9.1)
- 大分市美術館 (097-67-0189) 「アメリカから来た日本」(～9.1)
- 熊本県立美術館 (096-352-2111) 「棟方志功展」(8.9～9.16)
- 福岡市美術館 (092-714-5051) 「カンディンスキー展」(8.1～9.1)

## 今月の4コママンガ

### 「絶体絶命」



イラストレーション: さとうあやか

## 編集後記

現代美術館のギャラリーIIは、レンタルではなく、学芸員の根を通して選んだ、熊本で活躍する方々の個展やグループ展を、2週間毎に開催していく市民ギャラリーです。絵画、彫刻から、いけばな、レース編みなどの手工芸まで、このAKLの取材を通して得た新たな美の才能を、どんどんすくい上げていきたいと思っています。経歴やジャンルにとらわれず、思い切った発表を私たちにを見せてください。みなさんの命がけの作品が熊本市現代美術館を作っていくのです。

(学芸員長 南 真 宏)

### 寄稿者紹介

#### 兼城 昌山 (S.8)

Shozan Kaneshiro

「若いは有利するのでなく成熟することである」とは90才の目野原成明医師のことばである。その通りだが、如何に熟するかが問題である。

#### 森山 淡草 (H.30)

Tanso Moriyama

久しぶりに『莫山先生』(NHKでおなじみの有野の書家・静莫山の作品展を観た。莫山先生の超然または飄然たる強自性の魅力はあらぬ印象を覚えた。それはあの『莫山流』が確立する頃の筆韻でエネルギー溢れる田中であって、近年はどうもパターン化してしまっ、あの莫山先生でも…と思った。

#### 田代 晃三 (K.1)

Kozo Tashiro

モランティーンは調子や色の対比や形の配置の的確さをどうやって手に入れたのだろうか。

### 学芸員紹介

#### 本田 代志子 (K.10)

美術館入口では、ボランティアさんの一輪さしも始まっています。ご協力下さい。

#### 蔵庭 江美 (H.20)

夏の夜空にはやっぱり向日葵が咲いています。

#### 金澤 朋 (K.0)

花が華の飾りがついに開花。うれしいものです。

#### 坂本 顕子 (K.50)

大分の日自人工工場は一見の価値あり、日本の近代の礎そのものがあります。

#### 冨澤 治子 (H.7)

『田山清徳展』、『藤沢武二展』。日本近代絵画の黎明期に生きた二人の功業も興味深い。

発行元/ART KISS LETTER アートキッス・レター Vol.14 2002年8月15日発行 〇無料〇

編集人/田中 幸人

編集長/南真 宏 担当/冨澤 治子

印刷/熊本県印刷センター協業組合 デザイン/松永 社デザイン事務所

発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3

TEL.096-278-7503 FAX.096-359-7894